

【②見方や考え方ーB：授業をつくる教師の視点】

■大切にしたい子どものものの見え方

ー遠近法を無理強いしていませんか？ー

風景画家ホッペマの「並木道」をお手本に描かせたような、明らかに一点透視図法を教え込んだような小学生の作品を見ることがあります。小学校の段階ではこの遠近法は無理であり、図法的な学習がどのような意味を持つのか疑問に思います。絵を描くときに大切なことは、立体的に描くことや奥行きを表すことが主眼ではなく、子どもが心に感じたことをそのままに表現することでしょう。

触覚型の子どもは、遠近の表現よりも、興味のあるものを大きく表現し、色彩や表現は大胆です。雑な表現ととらえがちですが、対象を素直にとらえ、のびのびと表現できる子どもとして見てあげたいものです。

直感的な子どもは、表現は記号的・抽象的で平面的な表現です。具体的な表現ではなかったり、一見すると何を描いているかわからなかったりする場合がありますが、子どもと対話する中では、それぞれ描いたものには意味があることがわかってきます。リズム感のある表現や豊かな色彩感覚を認めてあげましょう。

視覚的な子どもは緻密にデッサンをこなし、写実的であり、いわゆる「上手い」と言われる子どもです。

図工という教科の目標は決して上手い子を育てることではありません。題材や絵を描くことを通して学ぶべき資質や能力をしっかりとおさえ、一人一人の子どもの表現を認め、励ましていきたいと思えます。

遠近法は表現の一つの技法でしかなく、まだ見えない時期の子どもに無理強いしたり、一方的に教え込んだりすることは避けたいと思えます。

触覚型の子、直感的な子、視覚的な子、どの子の表現も良いところを褒めて、自分の表現に自信を持つことができるように教師は声をかけていきたいものです。

ほんまもとふみ
(本間基史：東京都新宿区立落合第六小学校)